

平成20年度図書館情報メディア研究科プロジェクト研究 研究成果報告書

種 目	萌芽研究		研究代表者 氏 名	後藤嘉宏
研究課題	中井正一と『美・批評』（1930-35）『世界文化』（1935-37）『土曜日』（1936-37）－思想集団のリーダーと同人及び雑誌・新聞の媒介性			
研究組織（研究代表者及び研究分担者）				
氏 名	所属研究機関・部 局・職	現在の専門	役割分担	
後藤嘉宏	図書館情報メデ ィア研究科	社会情報学、メデ ィア論	研究代表者	
研究目的				
<p>京大美学美術史専攻専任講師を務め、映画を理論の中核に位置づけた中井正一（1900-52）は、『聾啞年鑑』（1935）書評にて目の不自由な人の世界を想像することで、当時のものいえぬマスメディア状況を相対化できると記した。そもそも目の不自由な人ほどではないにせよ、画家は視覚、音楽家は聴覚に特化するよう、大なり小なり五感の配分に偏りをもつ芸術家という存在が、特定の領域に五感全てで感じた世界を映し出す営みが芸術であるとされる。この特定の感覚領域と全領域との往復運動が、自分と異質な人との交流を導くし、芸術領域の議論を他の領域へと拡大する。中井は『美・批評』（第1次・1930-33）という美学雑誌を京大瀧川事件（1933）以降、『美・批評』（第2次・1934-35）『世界文化』（1935-37）という闘争的雑誌へと発展させ、芸術諸領域の異質な分野の交流を芸術畑と政治・哲学畑の人間との交流へと飛躍させた。また読者の投稿で作られる隔週刊新聞『土曜日』（1936-37）を刊行し、小学校卒の大部屋俳優と京大卒の弁護士と中井の3名がその編集に当たることで、異質な領域の人々との交流をさらに展開させた。本研究は中井のこのような実践と彼の理論との関係を、雑誌の内容分析を通じて探ることを目的とする。そのことで、ボーダレス状況を深めつつある現代社会に裨益するメディア実践を模索する示唆を得たい。</p>				
研究成果				
<p>上記「目的」で記した、「芸術諸領域の異質な分野の交流を芸術畑と政治・哲学畑の人間との交流へと飛躍させた」雑誌が『美・批評』（第2次）と『世界文化』である。当初前者の分析も予定したが、まずは復刻のされている後者の分析から取りかかった。そこで、この中井が事実上主宰し、ファシズムへの抵抗の論陣を張った同人誌『世界文化』個々の同人と中井との関係を明確化することを目指した。『世界文化』復刻版すべてを複写し、pdf化し、さらにそれをOCR読み込みし、TEXTFILE化し、随伴分析等の定量分析することを試み、それに併せて定性分析も行った。定量分析については、旧漢字を用いていて、印刷状態が万全でないものもあり、OCRで読みとったテキストを修正するのに時間がかかっている、未だ研究の準備作業全体の1/3しか進んでいない。その定量分析の準備作業をする中で併せて行った、定性分析においては、以下の5点を明らかにした。なお、この定性分析は、上記「目的」に添って、(1)異なる領域との媒介性(2)リーダーと同人の相互作用という二つの観点から資料を読み込むことによってなされた。より具体的には、(1)美学系の集団が、他の哲学・文学でマルクス主義的なメンバーを加えることで、集団全体あるいは個人でどのような変化をしたかを、『世界文化』誌面の分析を通じて見ること、(2)リーダーである中井と同人の相互作用がどのようなものであるのかを、同誌面の分析を通じて明らかにすること、の2点を目指した。</p> <p>①唯物論者と美学畑の同人の論点取り合いの状況について</p> <p>『美・批評』（第1次）は元々美学系の研究同人誌であった。京大瀧川事件を契機にして、それに、文学・哲学その</p>				

他の分野の新たな同人を加えて『美・批評』（第2次）へと発展し、さらに『世界文化』へと雑誌を衣替えした。中井は、元々美学畑であるが、自由主義的なモダニストである美学畑の同人とマルクス主義の傾向の強い新たに加わった同人との中間的な位置にいたと平林一は指摘する（平林一（1968）『美・批評』『世界文化』と『土曜日』—知識人と庶民の抵抗—（同志社大学人文科学研究所（キリスト教社会問題研究会）『戦時下抵抗の研究Ⅰ』みすず書房,p.249）。

美学畑でモダニストとされた中井ら『美・批評』（第1次）同人が、『美・批評』（第2次）の時期から加わる、真下信一ら弁証法唯物論を主張する同人と論点を取り合い、前者が後者に押され、中井らもマルクスを読むようになったと、久野収は証言しているが（久野収（1976）『読書のなかの思想』三一書房 pp.172-173）、その実情は、『世界文化』だけに関していえば、むしろ時を追うに連れて、後者の論説が減っていることが分かった。ただし『美・批評』（第2次）も含めると自ずと結果は異なりうるが、その点は後日に委ねる。『世界文化』同人が一斉にその年の11月に逮捕されることになる、1937年については（36年11月号頃から）、むしろ広い意味での芸術関係や、海外情勢の紹介記事の比率が増えて、タイトルそのものから、マルクス主義や政治性を示唆・表明する記事はなくなっている。例えばマルクス主義哲学の急先鋒であった真下信一も、文芸面での書評を書いていて（1937年1月号・通巻25号「新刊批評 熊沢復六著『ゴーリキイ人生読本』」（六芸社））、哲学・政治理論面の文章はこの時期載せていない。これは政治情勢の変化によって、自由主義者とマルクス主義者の共同戦線としての人民戦線であることを表に出して明示するよりは、自由主義者のみの抵抗組織の形を採った方が有利な状況になりつつある政治情勢を反映しているともいえよう。ただし真下信一ら『世界文化』同人の左派メンバーが同人を兼ねていた『唯物論研究』は、1938年3月号まで続いており、この雑誌の中心にいた戸坂潤が執筆禁止処分を受けるのは37年の年末であるので、単に政治情勢のみではない『世界文化』同人の中での勢力の変化、路線の変更も想定されうる。37年11月の中井ら『世界文化』同人の治安維持法違反による逮捕は、彼らにとって唐突感をもって受けとめられているので、政治情勢だけでなく路線の転換の可能性が高いと思われるが、その点の詳細は今後の検討課題である。

## ②文芸的公共性から政治的公共性への発展の検証

また、芸術的関心は文芸的公共性として政治的公共性へと発展していく、すなわち政治的関心へと媒介されると、ドイツの社会学者・哲学者ユルゲン・ハーバーマスは『公共性の構造転換』において述べているが、『美・批評』（第1次）から『美・批評』（第2次）への転換は、京大瀧川事件を契機とした政治運動への転換であるので、ハーバーマス流の文芸的公共性が政治的公共性へと媒介されるという理論の一つの実例としてみるのが可能である。特に中井正一個人についていうならば、恩師深田康算の美学理論は芸術を、それ自体で自己充足的なものと捉えず、社会に対して開かれたものと考えていて、そのような深田の考え方を基本的に中井は引き継いでいたとされる。したがって、中井についていえば文芸的公共性が政治的公共性に発展するのは当然であるし、それゆえ、彼が瀧川事件で瀧川幸辰教授擁護の運動に積極的に関わったといえる。また、『美・批評』（第1次）にしても、深田が病没し、『深田康算全集』（岩波書店）を編纂するために集まった仲間で作った同人誌である。よって、基本的には芸術批評が政治的なものへと転化することにさほど抵抗を感じないものと推察される。

しかしそのような芸術的批評性が政治的批判へと媒介されるか否かは、雑誌や同人全体の流れとして媒介されるといえることではあっても、個々の同人の方向性の転換として、そのように捉えることができるか否かは、別途検証を要する。そこでその面に着目して、ここに記された美学畑、要するに第1次『美・批評』からの同人の論攷の主題を問うことを目指した。具体的には中井以外の美学畑の同人に関して、辻部政太郎は演劇、長廣富雄は音楽と、それぞれの本来の領分を守った論文を、少なくともタイトルを見る限り、記していることが分かった。ただし内容までみると、例えば辻部の「関西新劇界の上向線」において、「これまで不入りと同義語のやうにさへ思はれた新劇に一つの記録を（関西でも）作ったことである。いかに既成劇壇の固化したマンネリズムが飽きられてゐるか、又建設的な文化への一般民衆

の飢渴が烈しいものであるかの証左である」(1937年1月号(通巻25号))と記され、新劇の政治的傾向に寄り添った文章とはなっている。また例えば長廣においても「クルト・ワイルと音楽劇場」(1937年2月号(通巻26号))というタイトルの論説を記す。ただしマルクス主義劇作家ブレヒトの『三文オペラ』の作曲担当者としてのワイルを取り上げるのではなく、アメリカ亡命直後のワイルを取り扱う。ここでは既存の歌劇のように歌に従属した音楽劇ではなく、役者が台詞を喋るように歌を織り交ぜる音楽劇が、ワイルによって目指されている点が評価される。他方、美学畑の同人のうち中井のみは、戦前の代表作「委員会の論理」を3回に分けて分載しているが、他の美学系の同人は、自分の固有の持ち分を守っているといえる。また、中井に及んでも、書評や映画評以外で、署名入りの記事は『世界文化』の時期には、中井の戦前の最も代表的な著述であるとされる「委員会の論理」(1936)のみであり、芸術上の批評を専らとする者が政治・哲学上の批評に発展させるのに、中井でさえ満を持して行う必要があったといえよう。しかも『世界文化』1935年8月号(通巻7号)の「編集後記」(無署名)では、「次号の巻頭は暫く沈黙を守つてゐられた中井正一氏が書いて下さることになつた」と記され、実際中井としても準備してかかる必要があったことが窺え、なおかつ「次号の巻頭」は別の人物が担当し、結局この年には中井の文章は一切載らず、翌1936年1月号(通巻13号)から3月号にかけて「委員会の論理」を連載することになる。1936年1月号(通巻13号)の「編集後記」では次のように記される。「巻頭を中井正一氏の雄篇で飾ることが出来たのを喜び度い。本論文は最近氏の到達された立場からの産出であり、論理の系譜的分析によつて、吾々の採るべき論理を開示されたもの、本号には半ばしか掲載し得なかつたが、示唆に富み、斯界の大きなトピックとなるであらう」。従来の中井正一研究では、彼の『世界文化』への寄稿の少なさに着目する者は私以外いなかったが、このように同人から「暫く沈黙を守つてゐられた中井正一氏」と記されていることは全く今まで紹介されていなかった事実である。なお翌月、1935年9月号の「編集後記」には「中井正一氏からは「思想」9月号に御寄稿の論文の姉妹論文を戴いたが、本号は紙数を制限した為掲載を延ばさねばならぬ次第となつた」とある。

さらに、哲学でも美学でもない、文学畑の同人の動向にも着目する必要性が感じられた。例えば1936年4月号(通巻16号)ではロシア文学専攻の熊沢復六による「シェークスピア研究序論—古典遺産の問題—」が載っているが、マルクスやエンゲルスがシェークスピアを非常に愛好しているばかりか、マルクスの理論的着想の多くが、シェークスピアの作品から得た示唆によって構成されているという点を論じている。あるいはまた、『美・批評』(第2次)から加わった同人で、中井を左寄りの立場からアジっていたのが新村猛であるとされているが、新村は仏文学専攻である。美学畑同人のみが『美・批評』(第1次)からいた同人であるという事情もあるが、美学畑の非政治性に較べて文学畑は政治性が強いように思われ、この相違の理由も今後の究明すべき課題として興味を持たれる。

つまりハーバーマスのような「文芸的公共性」のもつ芸術作品への批判性が政治的な領域への批判性へと方向転換して「政治的公共性」が芽生えるという議論は、『美・批評』(第1次)から『美・批評』(第2次)『世界文化』への転換全体については、おそらくはいえるものの、個々の同人の変化の有無に着目する限り、その議論が妥当する側面は多いとはいえないということが判明した。なお、この問題については『世界文化』同人たちの戦後の執筆活動の傾向分析とも併せて考えるべき問題である。彼らの1945-50年の文章のほとんどはメリーランド大学所蔵のプランゲ文庫に収められている。本研究科プロジェクトの直接の対象範囲ではないが、研究内容上は連続するこの問題については、早稲田大学20世紀メディア研究所主宰のプランゲ文庫研究会で報告した。

### ③『世界文化』誌面から見られる『土曜日』との関連性

中井が実質、上記能勢克男、齋藤雷太郎と主宰した隔週刊新聞『土曜日』の「巻頭言」は、読者の投稿で作られる新聞という宣言と共に良く知られており、引用される。他方、『世界文化』の「編集後記」は今まで中井研究や『世界文化』研究では引用されてこなかった。しかしここでも読者の投稿を呼びかけている。具体的には『世界文化』1937年7月号(通巻31号)の「編集後記」では、この雑誌が同人誌でないかのようにいう。「今までわざわざ断つておくまでも

ないと思つて、しるさなかつたことであるが」と前置きして、以下のように記す。「本誌に就いて未だに意外な誤解が残つてゐるのが分かつたので、ここで改めて一言説明を許して戴きたい。といふのは、本誌を以て同人雑誌と見做すやうな誤解なのである」。これはある意味、『土曜日』同様、読者の投稿を促すための文章である。しばらく後、続けて次のように記される。「右のような事情を読者諸氏も汲み取られ・・・在来の本誌によつて大体の編集方針をご了承の上遠慮なく御投稿願ひたいのである」。また「要するに、本誌は執筆者諸氏に対して何等の拘束力ももたず、逆に、執筆者諸氏も本誌に対し何等の義務も負はれない事をここに明かにしておく」とも記される。その点では荒瀬豊が述べた、同じ中井の積極的に関わり、事実上主宰した媒体であっても『土曜日』と『世界文化』では人脈も方法も異なっていたという記述（荒瀬豊（1978）「読者の弁証法 『土曜日』における実験と実践」（鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』世界思想社）に、この限りである程度、留保を付ける必要も生じてきそうである。もっとも上記の引用文は、官憲に対して、ある種の言い逃れの道を作ろうとするレトリックともとれるし、他方で①でみたように、1937年の各号で美学雑誌としての様相が復活しているという面からすると、同人のヘゲモニー争いにおいて、美学畑、要するに中井に近い勢力が優位に立ったことを裏付けるものであるかもしれない。

他方、『世界文化』1936年5月号（通巻17号）の「世界文化情報」には、「週報『ヴァンドルデイ』一創刊より今日まで」という記事が載る。『ヴァンドルデイ』は邦訳すると『金曜日』であり、中井の関わったもう一つの媒体『土曜日』がそれを模したとされる新聞である。しかしここでは、中井らの『土曜日』のように読者の投稿で作られる新聞という観点は採られていない。それどころか次のように記される。「作家が創刊し、作家が指導する「金曜日」は此の国の自由な人々の機関、世界の自由の反響となるであらう。「金曜日」は此の目的で作られた」。多分に資本から自立した作家による新聞というのがフランスの『金曜日』であるとする、そういう資本家と作家との対立の先にある、作家と読者の対立さえ見据えるのが中井らの『土曜日』であったといえよう。そこへの目配りはこの「週報『ヴァンドルデイ』一創刊より今日まで」という記事にはない。その意味では『土曜日』の中井と『世界文化』の主な同人とは、ある程度距離があつたのかも知れない。もっとも山田宗睦は、「また『モンド』誌から『ヴァンドルデイ』誌への動きも紹介され、これにまなんで『世界文化』の中心的グループが、週刊『土曜日』を出すようになる」（山田宗睦（1963）「《日本の思想雑誌》『美・批評』、『世界文化』」（『思想』470号）p.112）と記すが、そもそも荒瀬のいうように両媒体の人脈には違いがあつたし、『世界文化』同人であつた武谷三男も次のように証言する。「『土曜日』は左翼からはインテリの自慰行為だと批判された。私の親しい友人にもそのように言う人がいて、盛にこの運動を甘いインテリの自慰だと批判したので、私もその影響で多少批判的であつた。しかし後にその意味がよくわかつた」（武谷三男（1962）「思い出」中井正一著・久野収編『美と集団の論理』中央公論社、p. 248）。資本家と作家の対立への着目と、作家と読者の対立への着目は大きく違うので、基本的に山田の見方には妥当性を欠くといえよう。

基本的に読者の投稿で作る新聞『土曜日』と、知識人がインテリ向けに作った『世界文化』とは、同じ中井の積極的に関係した媒体であっても、相違があると思われるが、読者の投稿という観点で『世界文化』を見ても、1936年5月号の『ヴァンドルデイ』誌の紹介と、1937年7月号の「編集後記」では隔たりがあり、この隔たりの意味の解明は、今後の重要な研究の課題となる。

#### ④国際情勢の客観的紹介とそのもつ意味

この雑誌は、反ファシズムへの人民戦線を志向したものと一般に理解されてきたし、私もその見解に基本的に異を唱えるものではない。ただし同誌の「世界文化情報」には左派の動きのみならず右派の動向も載り、しかも右派の紹介記事においてさえ、ものによっては、ある種の客観的伝達を模索している面もあることが分かつた。例えば、1937年1月号（通巻25号）では「モズレー卿の率ゐるイギリス・ファシズム運動」という記事が載る。イギリス政府はモズレー卿の率ゐるファシストたちの運動の急進主義をイギリスの政治的伝統にそぐわないとして、規制しようとする。この

規制法案はまもなく成立しそうであると、この記事では紹介される。しかし次のような懸念を記して締めくくられる。

「一般新聞の論調はファシズムの弾圧として好意を示す一方この法案の或物が立案者の意図に反して、進歩的政策の擁護を拘束するに用いられるに到るかもしれないと評してゐる。／事実、言論と集会との国民の真の自由には差支へなくこのやうな法案が実行される事は用意ではないであらう」。言論・思想の自由はたとえファシズム勢力に対しても制限するべきではないし、その制限は諸刃の剣になるという議論は、正論ではある。しかし国際政治上のファシズム勢力と現に闘いつつあるイギリスの情勢からすれば、この法案に与するのが『世界文化』同人側の利益に適うはずであるのに、正論を吐く。これはこの雑誌がある種の客観性を志向しているからなのか、原理主義であるのか、あるいは政治志向において一枚岩で必ずしもないのか、あるいは日本の官憲当局への目眩ましの戦略からなのか、理由については、今後、究めていく必要がある。もちろんこの記事の類の方向性は例外的であって、概ね反ファシズムの方向性は明瞭に示されている。ともあれ世界情勢の客観的伝達の志向が、反ファシズムの雑誌といわれるこの『世界文化』において強いことが、今回判明したが、そのことは、戦後、国立国会図書館に行ったあとの政府刊行物の納本制度（国際交換に供する）やユネスコへの中井の取り組みとも関連すると考えられよう。

#### ⑤中井が肯定的に評価する思想家への『世界文化』記事における評価

思想集団のリーダーの媒介性、影響力の有無を測る一つの指標として、中井の評価する人物でありつつ、マルクス主義者から低く評価されうる人物への評価を取り上げることが出来る。これについて、テキストの電子化が完遂すれば、内容分析法によって、自動的に検出しようと考えていたが、今回は定性的に捉えるに留めるが、まずカントについて見てみる。中井の敬愛する恩師深田康算が『判断力批判』の本邦初訳を試み、中井自身戦後尾道での文化運動でカント講座を行い、中井はカントに思い入れがある。しかし例えば1935年8月号（通巻7号）の「世界文化情報」の「ソヴェート文化ニュース」で「シルレルの近著『ドイツに於ける文芸科学』」が記されるが、その著書ではドイツのマルクス主義文芸科学の代表者メーリングに多くのページが割かれているという。そこで次のようにカント美学への批判的言辭が記される。「文芸批評家として彼も、多くの原則的な誤謬を犯してゐるし、最後までカントの美学の観念論的影響をぬけきれなかつたのである」。あるいは中井が1930年頃に心酔し、その時期の多くの論文で依拠していたハイデッガーもナチスへの協力者への道を歩みつつあった時期である。例えば1935年12月号の「世界文化情報」では「ナチス・ドイツの文学理論」（川井修）としてキンデルマンというナチスの御用文学者を紹介するが、そこでキンデルマンの文章を引用する。「わがキンデルマン氏は、「ナウマンによって遂行されたゲルマン的根本態度とハイデッゲルの『配慮』や『被投擲性』の現象とこの種の接近化に関する論議は、この重要な問題圏へ多くの光を投げるだらう」。なお、中井のナチス時代を経たハイデッガーへの評価は未詳ではあるが、おそらくは否定的なものであろうとされてきたが（杉山光信（1983）『思想とその装置1 戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社）、ブラング文庫所収の文章をみると、戦後ナチスとの協力関係を知った上でも中井は、ハイデッガーを肯定的に捉える可能性を模索していることが分かった。また中井は三木清の『パスカルにおける人間の研究』（1926）書評以来、キルケゴールに関心を持ち、その関心については久野収も証言するところであるが、1935年12月号の「新刊批評」では秋田徹こと真下信一によって、ヘフデフィング著鳥井博郎訳『哲学者としてのキルケゴール』が取り上げられる。ヘフデフィングの立場を秋田は肯定する。「キルケゴールの『人格と活動とに心理的＝歴史的並びに批判的な研究を与える』つもりであることを標榜する限りでは、ヘフデフィングは全く正しい」。ただし、真下はヘフデフィングの歴史的方法が中途半端に終わっている点を批判する。ただし中途半端なこの研究であっても、「現代のいたづらに反動的なニイチエ＝キルケゴール熱に抗しては多かれ少なかれ何らかの寄与たり得るのである」と真下は評する。要するにキルケゴールの悪い面をきちんと抉っているからというようである。「私は此の一節を此処に再録せずにはゐられない。ヘフデフィングは言う」と真下は書き、キルケゴールが「単独者」を強調するあまり、社会的な権威に追従的である姿を描いたヘフデフィングの文章で、真下はこの

書評をしめている。キエルケゴールについては1936年1月号（通巻13号）でも「キエルケゴール・ニイチエ・ヤスパーズーヤスパーズの新著「理性と実存」について」という文章が、雉本こと栗本勤によって記される。ヤスパーズの発言として雉本は「現在の哲学はキエルケゴール、ニイチエから何を学ぶべきであるか？彼等は例外である。継承すべき模範ではない。彼等は哲学体系を解体する。然も積極的に哲学を建設しない」という発言を引用した上で次のように述べる。「彼の取り上げるキエルケゴール、ニイチエは自らも称する如く歴史的なものではない。歴史を歴史として取扱わないで預言者的哲人を問題にするのが彼の立場である。だからこそナチスもその大学にかかる哲学を許容したのであらう。だが実存哲学も、一層積極的にナチスの御用哲学たらんためには、不安の哲学、危機の哲学に止まらず、今一段の磨きをかけねばならない」。このように栗本は、キエルケゴールそのものを批判するというよりは、それに依拠しているヤスパーズを批判している。しかし実存主義哲学がナチスの御用哲学であるということで、その源流の一つとされるキエルケゴールも間接的に批判される形を採っている。

要するに、中井が終生敬愛したカント、若い時期には少なくとも心酔したハイデッガー、キエルケゴールもこの『世界文化』という雑誌では否定的に評価されて扱われており、中井が同人の中心にいたという事実そのものも再吟味する必要性もあると感じられるし、そのことは雑誌運営を巡る主導権の問題の解明とも密接に結びつくと考えられる。

### 本研究の全般的な意義と課題

中井正一の研究は数多くあるが、中井が中心になった媒体の研究は、山田宗睦（1963）「《日本の思想雑誌》『美・批評』、『世界文化』」（『思想』470号）、平林一（1968）『『美・批評』『世界文化』と『土曜日』—知識人と庶民の抵抗—」（同志社大学人文科学研究所（キリスト教社会問題研究会）『戦時下抵抗の研究Ⅰ』みすず書房、239-275.所収）、荒瀬豊（1978）「読者の弁証法 『土曜日』における実験と実践」（鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』世界思想社、136-152）があるのみであり、さらに中井と共に『土曜日』編集に携わった齋藤雷太郎についての個別研究として伊藤俊也（1978）『幻の「スタジオ通信」へ』（れんが書房新社）がある。いずれにせよこれらのメディア及びその関連事項の研究は30年以上前ものしかなく、今回定性分析によって得られた結果だけであっても、新たな知見を加えることになるといえる。しかも今回『美・批評』『土曜日』に及んでいないし、定量分析については準備作業の途中までしか進んでいない。これら残りの作業の進捗によって、上記の5点についてもさらに深められるし、さらなる知見を得られる研究へと発展すると考えられる。また中井正一研究においても、『世界文化』同人との相互の影響関係のなかで捉えたものはないし、そもそも全集未収録で『世界文化』掲載の中井の論説についても言及する研究はない。これらの作業を深めることで、思想集団のリーダーと同人との媒介性が明確になり、さらに「目的」で記した五感の一部に特化することで、それを別の感覚に転化し、政治その他の問題へと展開していくという面も、それぞれの同人の本来の専門分野と論説のタイトル・内容との関係を探ることで、より明確になろう。

### これまでの成果と今後の課題の要約

上記①-⑤の5点について成果と今後の課題を纏める。

#### ①唯物論者と美学畑の同人の論点取り合いの状況について

【分かったこと】『世界文化』の後期（特に1937年から）ほど美学畑が優勢に

【今後の課題】 i) この変化の理由（ヘゲモニーの変化？政治情勢の変化？）。 ii) 『美・批評』までをも含めた調査。

#### ②文芸的公共性から政治的公共性への発展の検証

【分かったこと】全体としては文芸的公共性から政治的公共性へと発展・転化しているが、美学畑の同人は、変化が緩い。

【今後の課題】 i) 文学畑の同人の政治性の理由を、同じ芸術分野でありつつなぜ美学畑と違うかという観点で探る。

ii) 中井の論文が『世界文化』で一度しか掲載されていないことの意味を探る。特に「編集後記」での予告にもかかわ

らず掲載が遅れているという事実。

### ③『世界文化』誌面から見られる『土曜日』との関連性

〔分かったこと〕 i) 『世界文化』1937年7月号「編集後記」で読者の投稿を呼びかけている→読者の投稿で作られる新聞『土曜日』と『世界文化』の連続性の可能性 ii) 『世界文化』1936年5月号での『ヴァンドルディ』（金曜日）の紹介文の精査・・・『土曜日』と繋がるという山田宗睦の指摘とは逆に、読者の投稿という観点が全くない。

〔今後の課題〕 i) 『世界文化』と『土曜日』の連続性を窺わせる事実と、断絶性を窺わせる事実の双方を見出したので、そのいずれの要素が強いのかを今後精査する必要がある。 ii) ①でみたように1937年に美学雑誌の様相を取り戻している点からすると、この〔分かったこと〕 i) ii) 両者の矛盾の時期の相違と照応する可能性がある。よってそのような変化の理由が主導権争いによるものか、政治情勢が厳しくなったことによるのか、あるいは他の理由があるのかを精査する。

### ④国際情勢の客観的紹介とそのもつ意味

〔分かったこと〕 この雑誌の海外の紹介においてファシズム勢力の側の紹介が多くあるが、それらの一部に反ファシズムの党派的な立場を表にせず、客観的な事実の分析をし、場合によってファシストの側に有利になる可能性のある発言をするものがある。

〔今後の課題〕 その持つ意味を探る。

### ⑤中井が肯定的に評価する思想家への『世界文化』記事における評価

〔分かったこと〕 中井が肯定的に評価する思想家に対して『世界文化』では否定的に記述するケースが少なくない。

〔今後の課題〕 雑誌の主導権の問題も併せて、また中井が編集者的な位置、「思想の発酵母胎」（鶴見俊輔が中井を評した言葉）としての役割にどのようにみずからを自己限定していたかを、この側面を抽出することで見いだせる。

これらを併せた今後の見通しとして、以下のことを考えている。

#### (1)中井と『世界文化』の距離

(2)1936年末から1937年という状況変化の分水嶺は何が原因としてあるのか？

(3)文芸的な関心と政治的な関心との「共通感覚」を媒介にした結びつきを考察・・・美学者の中井がマス・コミュニケーション論で以前から着目されてきただけでなく、オングやマクルーハンなど欧米のメディア論の大家も文芸の研究者であったし、またアランの『芸術の体系』は実質メディア論についての考察となっている。芸術的な興味関心は特定の領域から世界を眺めることに通じ、そのような特定の領域相互の眺めを付き合わせることで、共通感覚に訴えて、政治その他の関心へと飛躍する。そのような側面を、地道な解読作業を通じて示していきたい。

### 代表的な研究発表・特許等の成果一覧、特記事項等

1. (口頭発表) 後藤嘉宏「世代論と思想、文化運動、青年団—『世界文化』同人の文章を中心に—」(於・早稲田大学現代政治研究所会議室・2008年11月22日・20世紀メディア研究所ブランゲ文庫研究会)

2. (原著論文) 後藤嘉宏「中井正一の理論にみられる三木清『パスカルにおける人間の研究』(1926)からの影響について」『図書館情報メディア研究』6(1). pp. 27-41. 2008年9月

3. (原著論文) 後藤嘉宏「中井正一と共通感覚」『図書館情報メディア研究』6(2). pp. 15-36. 2009年3月